

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(60) 平成14年12月1日

江戸時代の国学(その2)

『万葉集遠江歌考』(S911/4)

賀茂真淵(元禄10(1697)年～明和6(1769)年)は、浜松出身の国学者です。その先祖は、賀茂県主で、京から下向して遠江国浜松郷岡部(現在の浜松市伊場町)に賀茂社の新宮を造ります。真淵は分家筋の東岡部家の三男に生まれますが、実家が貧しかったため、養子に出され、成年にいたるまで養家先を転々とします。その間、11歳の時に杉浦国頭の妻真崎に手習いを教わりました。真崎は荷田春満の姪であり、その夫国頭は春満の門人でした。真淵は、26歳の時に杉浦家歌会で初めて春満に会い、そして37歳の時に京に上り春満に師事します。門人中でも抜群の才能を認められますが、4年ほどで春満が亡くなったため、その嗣子^{ありまろ}在満のいる江戸に移ります。そこでも才覚を表し、在満の後を継ぎ、田安宗武(8代將軍吉宗の子)に仕えます。師である春満と同じく大名家に仕えるとともに、江戸における荷田門の代表的な地位に立ちました。

『万葉集遠江歌考』は、江戸に移って田安家に仕える前、寛保2(1742)年、真淵が46歳の年に著されました。万葉集中、遠江で詠まれた歌や、遠江出身の防人の歌、東歌などについて注解、考証してあります。当館所蔵の刊本は、文政3(1820)年、白須賀(現在の湖西市)の造り酒屋の主で国学者でもあった夏目鸞麿が刊行したもので、巻末の「遠江歌考を彫れる所由」に刊行の経緯が記されています。また、当時80歳だった国学者内山真龍が序を寄せています。

巻1(1首)、巻8(2首)、巻14(3首)、巻11(1首)、巻20(7首)、巻7(2首)、巻11(2首)、巻7(1首)を取り上げていますが、最後の1首は「遠江」の語が入っているが遠江歌でないと考証し、計18首を遠江歌であるとしています。いちばん多いのは、巻20に取り上げた防人関係の歌ですが、これら7首以外に11首あるが、拙劣であるので取り上げないと説明してあります。また、地名が詠み込んである歌として、「引馬野^{ひくまの}にほふ榛原^{はしばら}入り乱^{ごろも}り衣にほはせ旅のしるしに」(巻1)、「あら玉のきべの林に汝を立ててゆきかつましし寝を先立たね」(巻14)、「遠江引佐細江の^{とおつあふみいなさほそえ} 濤標^{みおつくしあれ} 吾を頼めてあさましものを」(巻14)などがあります。

この執筆の18年後、真淵は代表的著作である『万葉考』を著します。『万葉集遠江歌考』には、後に通ずる精緻な考証の中にもはつらつとした雰囲気うかがえます。

(参考文献)

『万葉集遠江歌考』(序・本文)

『賀茂真淵全集 第4巻』(S080/9)

三枝康高『賀茂真淵』(281.03/101)

寺田泰政『賀茂真淵』(S120/13)

神谷昌志『はままつ歴史発見』(S236/53)

浜松市立高校古典研究クラブ/注釈『万葉集遠江歌考注釈』

(S911/93)